

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

2000 / 9





一日一話、読み聞かせに最適の1冊です

子どもの心に  
伝えたい

# お話365+1

## 最新刊

世界や日本の昔話  
・創作童話の中  
から、子どもに話  
して聞かせたいお  
話を366厳選し、一  
日一話に配分して  
あります。  
楽しい話、怖い話、  
びっくりする話な  
ど、また、美しい  
言葉の詩も加えて  
あります。  
大人が読む手がかり  
となる「ひとくち  
メモ」「今日は何  
の日？」のコラム  
も設けてあります。



●4・5・6月



●7・8・9月



●10・11・12月

●1・2・3月



こわせ・たまみ／平山許江／編

AB判 各212頁 各定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの  
**フレール館**

# 幼児の教育

第99巻 第9号



幼 児 の 教 育 目 次

— 第九十九卷 第九号 —

© 2000  
日本幼稚園協会

ある日…………… (4)

老若男女共同参画社会の子育てを見通す(6)

— 支援される側からのメッセージ —…………… 金田 利子・今泉 依子…………… (6)

私が幼児教育を志した頃(II)…………… 津守 真…………… (16)

保育の見直し—その三

変化する子どもの成長を支える…………… 市川由利絵…………… (27)





耳をすまして 目をこらして(6)……………宮里 暁美…(34)

子どものいる暮らし―男・夫・父 散歩道で教えられたこと…葉原 昭徳…(36)

元気が出る、楽しめる文化財保存―カナダでの体験から―…波多野 純…(42)

幼稚園生活の中での自分のもの、みんなのもの……………伊集院理子…(51)

子どもの本から 父の記憶を集めた物語……………皆川美恵子…(60)

表紙絵／田中 千尋

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たえ「庭の一隅」

編集委員／田代 和美・田中三保子・高橋 陽子

編集部／仲 明子



# ある日

撮影・平野 清







# 老若男女共同参画社会の子育てを見通す(6)

## ―支援される側からのメッセージ―

金田 利子

今泉 依子

### はじめに

一回目の基調提案では、競争社会から共同社会をめざすことのなかで子育てもみんなのものとなっていくのではないか、また逆に子育てのつながりを求める中で、老若男女共同参画社会への可能性が拓かれるのではないかという考えを展開しました。二回目と三回目

は地域での子育てとかわる関係づくりについて、また、四回目には生涯発達のふるさととして人間発達を支える保育園・幼稚園の役割についてとりあげ、五回目には地域の連携における行政の役割に焦点を当てました。

子育て支援の連携は、「支援する―される」を越えて相互支援の関係になっていく所に特徴があります。

そうは言っても、はじめは、より支援を必要としている人と支援する側にたつ人が相対的に存在します。

そこで今回は、視点を変えて、子育て支援において支援される側の立場に立つて考えてみることにしました。そして、支援される親の発達について見なおしている。軽度発達障害児の親の立場と健康福祉センターなどの相談員の立場の両面をもつていて、静岡大 学保育研究室の共同研究者でもある今泉依子氏にお願いしました。

一人の人間にはいくつかの立場があります。私の場合は四人の子どもの母親、静岡LD（学習障害）児親の会きんもくせいとの相談担当、健康福祉センターの家庭相談員、保健センターの発達相談員などがあります。私が現在、子どもの発達のつまずき等に不安を覚え混乱しているお母さんたちの相談のつたり、療育教室の指導にたずさわったりすることは、私の子どもの存在と無関係とはいえません。子どもの一人が社会

性の獲得に困難を持つLD児であったことが私の生きかたを大きくかえ、今の私につながってきています。

私は「育てにくい子と母親の育児ストレス」をうんざりするほど実体験し、その悪循環をどうきるといいのかという葛藤の中で様々な人と出会い、切なさや恥ずかしさにうちのめされたり、ふみとどまつたりしながら、次第に、自分の子どもをふくめて、こういう子どもたちがいきいきと暮らせるようにするにはどんな援助が必要なのか、母親が堂々と生きていくには何が必要かを考え活動するようになりました。

ここでは私の母親としての経験と親の会のお母さんたちから寄せられた思いをもとに、LD等の軽度発達障害児を持つ母親の困難さをお伝えし、それを乗り越えていくためにはどういった援助があるといいのかについて問題提起したいと思います。

### 軽度発達障害児の母親であることの困難

静岡県LD児親の会「きんもくせい」には、LD、

及びその周辺児として高機能自閉症、ADHD（注意欠陥・多動症候群）ボーダー等診断を受けた軽度の発達障害児がいます。知的には大きな遅れはないため、多くの場合、小、中学校時代は普通学級に通っていますが、幼稚園、保育園時代から「気になる子」として浮きあがった存在であった子がかなりいます。ことばの遅れがあった子どもたちは、ことばの教室等で指導を受けてきましたが、ほとんどの場合障害ということばの重みに見合うような特別な配慮は受けていません。このことは、義務教育後の進学、就労などにさいしても、特別な配慮も援助もなくノーマルな子どもたちと同じ土俵で戦い続けることを意味しています。

個性と呼ぶにはそのアンバランスさがきわだっていても、それを補うものがないことでどれほど子どもたちにも過剰な試練を背負わさねばいけないのだろうか……もしも、視力が弱いのなら眼鏡をかける方法があるのに……。子どもがアンバランスであればあるほど、その親にはアンバランスを受け止めるだけ

の度量とアンバランスさを個性の範囲にとどめるための技量が必要であることを実感します。しかし現状では、子どもにふりまわされ、育てる力を発揮できずに疲労している母親の方が多いように思います。

では軽度発達障害児の母親の困難さはどこからくるのでしょうか。理由として次の四つが考えられます。

①アンバランスさの理由がなかなかつかめないこと  
（母親自身の気持のあり方からくる困難さ）

②子どもとの関係がとりにくいこと（子どもとの関係からくる困難さ）

③周囲の人間から非難されやすいこと（周囲の人間との関係からくる困難さ）

④軽度ゆえに専門家の援助が受けにくいこと（専門家との関係からくる困難さ）

それぞれについて具体的な状況をあげてみます。

①アンバランスさの理由がつかめないこと

子どもが軽度の発達障害児であることの困難さの第



一は、理由がわからない不安にとられることだと思  
います。ここが、ノーマルといわれている子どもや、  
逆に障害がはっきり目に見える形ででている子どもの  
親との違いではないかと思えます。

生まれたときにはどこにも異常はみえない。「なん  
だかおかしい」という不安にとられる時期がどの時  
期からはじまるのかでは個人差がありますが、育てて  
いるうちになんとも説明しにくい違和感を覚えるので  
す。第三者にいわれるまでわからなかったというお母  
さんもいるのですが、どちらかというとなんとなく不  
安に思っていた方が多いようです。けれども、「大き  
くなれば……」「男の子だから」等のことばでわきあ  
がる不安を打ち消していた時期があるようです。

私の場合もそうでした。なぜこんなに育てにくいの  
かで悩み、それは子どもの側の問題なのか、それとも  
私自身の問題なのかわからず、混乱しました。心理  
学を専門とする側の人間としては、子どもに問題があ  
ると直観しながらも、母親としての私がそれを受け入

れられないという葛藤も経験しました。むしろ、私に  
問題があると思いつつもとしました。育ちにくさの原  
因は子どもにはないという仮定、この仮定のほうが母  
親としては受け入れやすいのです。何故なら、育て方  
をかえれば子どもがちゃんと育つように思えるからで  
す。しかし、そう思うことで私自身は自分の物の見  
方、感じ方に自信をなくしていきました。

私も同じですが、親の会のお母さんたちは言いま  
す。診断で疑問が氷解すると。問題が解決するというこ  
とではなく、アンバランスな発達の理由がわかったと  
いう意味で納得するのです。診断されるまでは、育て  
方が問題だと思いつまされるのです。実際子どもの発  
達につまずきがでて

いて、それが障害と  
は見えないほど軽い  
となると、「育て方  
が問題」という仮説  
で説明づけたくなる



のは、先生の側としても当然のことかもしれないし、親自身もそう思いたくなる土壌があるのです。

私は診断されるまでの親の不安や葛藤、ここが発達障害児のサポートを考える上での重要ポイントのひとつだと思います。不安を覚えた親は身近の専門家（保健婦、園の先生など）にサインを出すことがあります。聞き分けが悪いとか、ことばがふえないとか、乱暴であるとか。しかし不安があっても、障害とまでは思っていないだけにはつきりした障害の宣告が反発につながることもあります。逆に「大丈夫」「考えすぎ」ということばにすがりつきたい気持ちもあります。ここではむしろ不安な気持ちを十分受け止め聞いてくれることが問題整理の糸口につながるように思います。

## ②子どもとの関係のとりにくさ

私自身の記憶に残っている感覚ですが、四人の子どものうち、LDではない子のときには、私は日溜まりのなかの猫のような気分を経験しています。子どもをおなかの上に抱っこする、ピタッと子どもが身体をあ

ずけてくる、やわらかくて

……抱っこしたままウトウト

してしまいそうになる穏やかな

時間。その記憶がLD児で

ある子どもとの関係では思い出せない。もしかしたら、あつたのかもしれない。けれども不安になること

やアクシデントが多すぎて、そういう穏やかな時間の

記憶が消えてしまったのかもしれない。

抱っこしようとするとすりぬけていく感覚。はげしい

夜泣き。呼びかけてもふりむかない。目をはなさな

いように注意していてもほんの一瞬のすきにアクシデ

ントがおきる。だからどうしても、子どもを叱ること

も多くなり、親の疲労も大きくなってきます。

子どもが扱いにくそうな印象を持った場合、親の育

て方について責めたくなるかもしれません。けれども

扱いにくい子の母親が二十四時間体制の子育てでとて

も疲れているということも考えてほしいと思います。

疲れすぎて、扱いの難しい子の気持ちを受け止めるゆ



とりが無いという角度で助言してほしいと思います。

育児疲労をとるためには育児の手がわりになるような人の存在があると、この状態が緩和されるように思います。システムがそろっていないときには父親の出番がとりわけ大切だということを父親に伝える役割が必要ではないでしょうか。

### ③回りから非難を受けやすいこと

近所の人や、全く知らない他人に非難の目でみられる経験はしばしばあり、その度に、身がすくむ思いをしました。浮き上がっている子の母親は子どもと共に孤立しやすいのです。とりわけ、父親からも非難を受けている母親は「育てにくい子と母親のストレス」の悪循環から抜け出しにくく、子どものアンバランスさにつきあっていく力が発揮しにくいように思います。

私自身、父親が母親である私に批判的だった時期にはストレスが大きく、その苛立ちが子どもにもむかいそうになったこともあります。診断、進学、就労の場面に、父親がいたかどうかで母親の安定度には差がでる

ことを実感しますし、父親がいつしよにいるかどうかで先生側の対応にも差がでたことも体験しています。

先生との関係でも胸がつぶれるような思いを多くの親が経験しています。全国のLD児親の会にアンケートをして学校や先生との関係で傷ついたこと、うれしかったことなどを調査しました(『学研実践障害児教育』二〇〇〇年一月号)。その結果を読んで、みんな大変な扱いをされているなと思いました。これは一人の先生は何気なく言ったのかもしれないが、親はいろいろな場面で非難されているので、非難に対して過敏になっていることもあるのかもしれませんが。

私は相談員として、親と先生の二つの立場から話しを聞き、また実際に二つの立場を経験し、「気になる子」をめぐる親と先生の間には壁ができるのは片方だけの問題ではなく、両者で作っているということを感じています。この壁を低くするために、どちらの側も相手を責める気持ちを抑えて「軽度発達障害」というキーワードで子どもの育ちにくさを見、対応方法をさ



ぐっていくことを考えてはどうかと思いません。

#### ④ 専門家の援助が受けにくいこと

アンバランスさが障害とは思えないこともあるだけに、専門家の継続的な援助は受けにくく、不登校やいじめなどの二次的な問題がでてきたからしか対応されていないように思います。実際、園や学校でも、先生が気になるということは感じていても、それが具体的な援助と結びついているケースは稀ではないでしょうか。きんもくせいのお会でも、園や学校で、担任の個人的な気配りの範囲をこえた支援は、ことばの教室の指導ぐらいで、やはりここでも、ことばの遅れがあった場合に限られています。

障害が軽いということが良好な予後とつながらないと指摘する専門家もいます。私も親の会の相談担当としてその通りと実感しています。それは理解されないこと、むしろ知的に遅れていないゆえに、逆に、できない部分への非難が大きいことも関連していると思います。子どもたちが自分が誰かの役にたっている、自

分は捨てたもの

じゃないという

ことを経験する

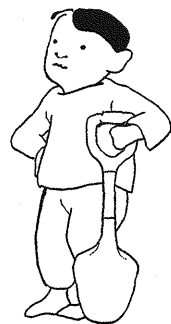
ことが少なすぎ

ます。

だからこそ意

識的に「自分は素敵」という経験を積み重ねる場が必要なのだと思います。意識して経験させていけないと彼らは「自分はだめな子」という低い自己イメージができてしまいがちです。ここが支援の重要ポイントだと私は思います。

そこで、きんもくせいのお会では、ボランティアの大学の先生や学生にお願いして、学習援助を中心にした「LD土曜教室」、モンテッソリーの教材を使った「モンテの会」、孤立しがちな義務教育以後の子ども居場所とソーシャルトレーニングの場として「青春講座」、問題行動がどこからきているのかを理解するための「個別指導の場」、親子で楽しい体験をするた



めの「遊びの会」などをつくりだしてきました。

しかし、親の会へたどりつくのは、親が子どもを理解するためのキーワード……LD、アスペルガー、ADHD、軽度発達障害などのことばがわかっていること、親自身に問題を解決しようという力がそなわっていないとむずかしいのです。

### 親の心理的レベルにあわせた援助

前記の四つの理由による困難さを乗り越えるためには、親自身の心理過程について理解しておいていただかないと、援助が効果的に働かないように思います。

私は自分自身の経験や、会のお母さんたちとの話から、親の心理過程には、①ハンディがあるかもしれないという不安を感じる時期（不安と否定で揺れ動く時期）、②診断が確定し、ハンディがあることにショックを感じる時期、③ハンディを認め努力する時期、④限界を感じる時期、⑤ハンディを受容する時期があると報告しました（『学実践障害児教育』一九九八年六

月号）。それぞれの時期は、発展的に移っていくというよりも、揺れ動きながら出現したり、それぞれの期間の長さも人によって違います。また進路決定の時期には再び、これでいいのかという不安、これほどこのハードルが高いのかというショック、なんとかしようとして努力し、もうだめと限界を感じ（あきらめ）、これでいいと思う（受容）ということを繰り返します。

とはいえ、一つの山場を乗り越えた母親は、そのことを肯定的に意味付けていける専門家やファシリテーターのはげましによって、次の山場を乗り越える力がついていくように思います。山場をいくつも乗り越えていくことで、母親自身に育てる力が備わり、やがては、他の母親のファシリテーター役に育っていくことを、私は自分の経験と会のメンバーの力強さから確信しています。

母親の自己肯定感が山場を乗り越えるエネルギーの源であり、そこを意識した援助であってほしいと思います。それは母親を非難するだけでは生まれてこない

ものだと思います。相談を受ける側にたつと「もつと  
しつかりして」と言いたいこともあります。しかし、  
それで変わることができるのは子どもの状態をある程  
度客観的にみられる時期になってからだと思います。  
混乱しているときには逆効果です。

私自身、子どもにやさしい声で話したいと思いが  
ら、そうできない状態になったこともありましだ。  
からまず、①気持ちを受け止め、②困っていることを  
いっしょに考えよう。③子どもと親のできていること  
を確認し、その後で、④気持ちはわかるけど、こうい  
うときこそ、ふみとどまっって、こんな方法もいいかも  
……（具体的な提案）、というような感じで相談を受  
けるようにしています。そういう助言者が、私はほし  
かったのです。  
（以上今泉）

## おわりに

一言で支援するといっても、される側の心の状態を  
理解しないと、善意の支援がかえって、される側を傷

つけていることがあるということがあります。このこ  
とを、学習障害という軽度発達障害の場合から、どの  
ような支援があると親の不安が取りのぞけるのかとい  
うことを、自身の体験に基づきつつ、一方で専門家と  
しての視点で提起しているのがこのレポートです。

子育てを困難にする四つの原因とそれを取りのぞく  
助言そして、親の五つの心理的レベル（時期）につい  
て明らかにしています。

親を不安にする障害や問題自体の特性からくる四つ  
の原因と親の五つの心理的レベル（時期）との関係に  
ついては、これから実践的にさらに明確にしていくこ  
とが望まれます。けれども、子育て一般において  
も子どもに問題を感じたとき親が不安に思う段階には  
共通のものがあるのではないかと思えます。このレ  
ポートは、子育て一般において、支援する側が親の問  
題を受けとめる上での心のレベル（時期）をよく理解  
していることの大切さを示唆してくれています。

最後に今泉さんと語る中で、このレポートには取り

上げられていないのですが、私が「なるほどそうだ」と共感した点について触れておきたいと思います。

一つは「お母さん」という呼び方についてです。相談しはじめたときは、当事者の母親としていくのですから、「お母さん」でよいのですが、ハンディを受容し他の子の問題の解決にも共に立ち上がろうとしてはじめているときには、すでに「お母さん」だけではなく、ともに支援する立場になってきている筈ですのに、その時にいたっても、名前があるのに、「お母さん」と呼ばれると、いつまで経っても、被支援者の立場にとどまらされているようでとても「対等にみられていない」という居心地の悪い感じを受けてきたというものです。とりわけ、親の方も、ある種の専門家である場合、どこかで専門家同士としての共感があってもいいのという思いになってくるでしょうし、相互支援のネットワークづくりにとつてもみずみず資源を無駄にしていくことになってしまいます。

もう一つは「専門家の子なのに」というプレッ

シャーについてです。むしろ「専門家の子だから」という方が正しいのではないか、ということについてです。「○○の親は、専門家（教師・保育者・看護婦・相談員等）なのに」という言葉を支援職の専門家の間でよく聞くことがあります。それは逆なのです。そういう状況があるだけに専門家・親は本音のほけないプレッシャーのなかにいます。むしろその気持ちを受けとめ、専門家ゆえの苦しさを分かち合うことが重要なのだという示唆です。

以上のように、支援される側の声を聞き、やがては支援されてきた人たちが支援者になり、対等にかかわる人々の相互支援の輪が大きくなるとき、競争社会ではない老若男女の共同する社会への道に一步近づいていけるのではないかと思えます。

金田（静岡大学）

今泉（LD児親の会きんもくせい相談担当）



# 私が幼児教育を志した頃(11)

津守 真

一九五一年、私は、六年前までは敵国だった国に留学し、戦争中は鬼畜と宣伝されていた米国人とも友人となり、米国人の方も、かつては残忍で野蛮と思っていた日本人を、同じ心情をもつ人間であることを知ってくれた。国と国との間で、相手の中傷する宣伝文句がどんなに人々を切り裂くことかをも、戦争を通して私共の時代は学んだ。私はこの戦後早い時代に米国に行き、家庭の一員として迎えられ、米国の家庭を内側から体験する機会を得た。その当時から、日本に帰ったら米国の家庭について本を書くことができると米国の友人たちに言われたものだった。それから五十年を経て



はじめて、私はこのことを書いている。私がお世話になった大部分の方々はすでに亡く、懐かしさにたえないのは人の常であるが、ここでは一九五〇年代初めの黄金時代の米国の家庭と人について、私が体験したままに記したいと思う。その後その人々とは繁く文通し、何度か再会し、私の壮年期を通して励ましてくれた人たちである。私の保育論の根底にはいつもその記憶が温かくあった。

### 最初の家庭―クラウンス家

パールハーバー（真珠湾）のことが話されたのは最初の晩だけで、翌朝からはクラウンス家での気持ちのよい毎日が始まった。

クラウンス老夫妻と私と三人で朝食を済ますと私は市電で大学に通う。私のメンター（指導世話役）である北川先生から、「米国人の家庭では家族皆がそろうまで食事をして待っているから、夕食に遅れるときにはかならず電話をするように。そういうことが信用につながる。米国人は一度信用すると、それは一生涯つづくから」と言われていた。この先長い間の米国人とのつきあいの中で私はそれが本当であることをためらわずに言うことができる。夕食後は、居間のソファに腰をおろして皆で歓談する。この最初の家では私の英語は特別に拙かったので、若いころ中学の英語の先生だったクラウンス夫人は私のために毎晩英語を教えてくれることになった。リー





ダーズ・ダイジェストや、ナショナルジオグラフィック、ライフなどの雑誌が主なテキストだったが、教養人の夫人は図書館から借りた書物を私によく見せてくれた。夫人は「aunt」という語は日本語で何というかと尋ね、私が「おばさん」と言うと、これから自分たちのことを「おばさん」「おじさん」と呼んでくれと言い、私はいつもそのように呼ぶことになった。夜はしばしば友人の老夫婦がトランプをしに来た。カナスタという簡単なトランプ遊びだった。おしゃべりをしながらトランプに興じるのが老夫婦の社交の楽しみだった。

クラウンス夫妻は、昔ながらの礼儀を守る古典的な人達だった。クラウンス家に泊まった二日目の夕食のときだった。スープを飲むときには、スープ皿の上に身を屈めるのではなくて、首を真つすぐに起こしたままスプーンを口の方に運びなさい、それが礼儀だと言われた。ナプキンは毎週一度洗濯し、私専用のデザインのナプキンリングがいつもテーブルに並べられた。翌朝は、コーヒーを飲むときには決して音をたてないようにと注意された。音をたてないで飲むと美味しさが半減すると私は思ったがじきに慣れた。

## ハリス先生

クラウンス家に行った次の日、私はスポンサーであるファースト・コングリゲーション





シヨナル・チャーチのサイデイ牧師に連れられて大学に行った。児童研究所大学院で私の指導教官に決まっていたデル・B・ハリス先生も同じ教会であった。当時先生は四十代はじめで、児童研究所の所長になったばかりだった。秘書のメアリーは、ハリス先生は学生の間で一番人気のある教授だと教えてくれた。握手をするとすぐに、先生は友人の原子物理学者に言及し、彼は広島島の原子爆弾で良心を責められて神経を病んでいると話された。そして申し訳ないと私に謝られた。私はアメリカの学者にこういう人がいることに心を打たれた。大学での私の勉学のプランを話したのはその後だった。(ハリス先生はそれから十五年後にフルブライト教授としてお茶の水女子大学で半年間にわたって講義をされ、日本の学生のなかに多くの影響を残された。先生については後にまた述べることになる。)

### 古い同窓生

クラウンス夫妻は、いずれも一九〇〇年頃のミネソタ大学の卒業生である。クラウンス氏は工学部の機械科を、夫人は文学部の英文学科を卒業し、すでに七十歳を越えていた。あれから五十年を経て、私共がその年齢に達し、その年齢でよく敵国の青年を家族の一員として家庭に泊められたと尊敬の念をあらたにする。その昔、クラウンス氏が大学を出てすぐに、ノースダコタのスポケインという町に鉄道技師として就職



し、一年後にクラウンス夫人が同じ町の中学の英語の教師になって赴任した。クラウンス氏に言わせれば夫人が追いかけて来たのだし、夫人に言わせれば旦那が呼び寄せたのだそうである。白髪になっても、こう言い合っているのを見るのは気持ちがいい。

クラウンス氏は、前年、長らく経営していた玩具会社を売って引退した。家の地下室に仕事場があつて、旋盤、ドリルなど金工具をそろえ、一日閉じこもつて、船の模型、馬車の模型など、精巧な工作をするのが趣味だった。私がいたときには、地下室と一階の間の天井に穴をあけ、扇風機を箱に入れて冷房装置を工夫して取り付けた。クラウンス夫人は口やかましい几帳面な人で、一見尊大ぶつた感じすら他人に与えた。クラウンス氏は鷹揚だがきちんとした人だった。来客の応対など礼儀正しく隙を見せない。しかし家庭の中の雰囲気は、私が子どもの頃の我が家と大差はなかった。この頃は、アメリカ人男性の平均寿命は六十七歳で、日本では一九四七年に五十六歳だった。

### ミセス・ストロウブリッジ

クラウンス氏の家にはミセス・ストロウブリッジという八十五歳になる老婦人が同居していた。クラウンス夫人の実の姉である。耳が遠くて、補聴器をつけているが、



いまだに嬰籙として自分の部屋は図書でうずまっている。歴史が好きで、地図を見ながら、古今東西の歴史の書物を読んでいる。私と知り合ってから、東洋の歴史を勉強し始めた。一八八五年に十九歳で結婚して、九カ月で夫に病死され、それ以来独身である。クラウンス夫人の話によると、夫に死に別れてから、その悲しみにうちひしがれて、しばらくワシントン州のケープフラッターリーに気晴らしのために転地していた。それから一年もたないうちに、姉妹の母親にも死なれてさんさんの数年だったと話された。それ以来六十年以上の月日を、夫の写真を自分の部屋に飾って眺め、妹夫婦の家に一緒に住んだ。

クラウンス家の皿洗いは数十年間ずっと、ミセス・ストロウブリッジの仕事になっていた。私がクラウンス家にいる間、皿洗いはミセス・ストロウブリッジと私の仕事になった。一時間も二時間もかけてゆつくりと皿洗いをしながら私はこの老婦人とおしゃべりをするのが楽しみだった。皿洗いを終わるとソファに座って、クラウンス夫人の英語のレッスンをかねたおしゃべりである。

### 映画会

クラウンス夫妻はよく映画を見に行った。黒沢明の「羅生門」や「美女と野獣」も私は米国で見た。



あるとき、いつもゆく教会で、子どものための映画会があった。その中に「我ら常に備えあり」というタイトルで、日米戦争の海上戦が出て来た。アメリカの潜水艦が日本の軍艦を撃沈する場面で、日本の飛行機を打ち落とす場面、艦砲射撃など、私は見ていて戦時中を思い出した。集まった子どもたちは六、十歳位の子ども二十人程だった。終わってから牧師さんが私の所にとんで来て、あらかじめ試写をしなかつたのでこんな映画を見せてしまった、全く手落ちだったと謝り、途中で何回やめようと思つたか分らないが、中止したらかえつて子どもに妙な印象を与えるだろうと思つてつづけたのだと話して、戦争中の日米間の事を話し合つた。この牧師さんは、良心的兵役拒否者（コンシエンシヤス・オブジェクター）で、私は戦時中に米国ではこういう制度があつたことを知つた。

### クリスマスの贈り物

一九五一年十二月、クリスマススイーヴの晩、クラウンス夫妻の教会のキャンドルサービスには私は伴われた。さんさんと降る雪の中の小さな教会の尖塔は絵のように見えた。翌朝クリスマスの日には、クリスマスツリーの下に家族が集まってプレゼントを開ける。私が小さいころ、わが家でも同じことがあつて、何日も前からこの時を楽しみに待つた。この日はクラウンス家で、私にもプレゼントがあつた。おじさんから



●



●



●

卓上カレンダー、ケンタッキーにいる息子、娘から私にもイニシャルを刺繍したハンカチ、ミセス・ストロウブリッジから二ドル入りの封筒、夫妻から私に部屋靴、それから、五ドル紙幣五枚入りの封筒とカードがついていて、「これはあなたがアメリカの最善の物を買うためのお金です」と書いてあった。私は口もきけず茫然とした。夜は、クラウンス氏の弟夫婦と息子、独身の老婦人と総勢七人で、ダウンタウンの十六階のビルのレストランにターキーのクリスマスディナーを食べに行つた。漢字で書いた日本からの婚約者の手紙はよい話題になつた。

クリスマスが終わつた翌日の午後、「おばさん」に呼ばれた。昨夜「おじさん」と遅くまで話したが、プレゼントのお金のことと誤解しないようにと前置きして私に言われた。「アメリカは世界中の人にいろんなものを分けて来た。このお金はあなたが良いものを持ち帰るようにという意味だ。良い物の解釈について、もうひとつ違うふうに考えてみよう。アメリカの物質ばかりではなくて、アメリカは物質以外のものをもっているはずだ。君はそれを日本にもつて帰るのが一番良いお土産だ。このお金は君がそれができるようにその手段として使うのが一番良い。だからこれは君が自分のために使いなさい。ここで勉強するにはコーヒーも飲まなくてはならないし、本も買わなければならぬ。そういうことに使いなさい」と言われた。陽が西の空に沈み、向かいの家の窓が赤く光っていた。私はアメリカに来て、全身を感じ



た。

### 玄関の鍵

ある晩、私のミネアポリス滞在中の住宅の世話をして下さるトンプソン夫人の家からクラウンス家に帰る途中、玄関のドアの鍵とスーツケースの鍵と間違えて持って来たことに気が付いた。しまったと思ったが、家に帰ると玄関のドアに鍵がかかっていた。助かったと思って入ってきたら、私の部屋の前に今日「おばさん」が修繕してくれたコートと玄関のドアの鍵がおいてあった。鍵のことは何度も注意され、落とさないように、忘れないようにと言われていて、今日も出がけに鍵を持ったかと言われたばかりだったので、恥ずかしかった。翌朝、私は顔を合わせるのがこわかった。「おじさん」「おばさん」は、叱ることもなく、冗談まじりに私をたしなめられた。その頃は現代とは違って、日本の私の家では夜も玄関のドアに鍵をかけたことはなかった。

この家に一カ月滞在の後も、私はしばしばこの家を訪れた。いつも台所口から勝手に入り込み、ドアをあけて声をかけると「おやまあ、よく来ましたね、私の息子」と手を広げて迎えてくれる。ミセス・ストロウブリッジが、台所の手をとめて、台所用のゴム手袋をはずし、「おやおや、だれかと思っただらあなただったのか、お父さんは



元氣か、お母さんは元氣か。手紙はよく来るか」などと尋ねる。「夕飯ができるまで、居間で新聞か雑誌でも見ていなさい」と言われて、私はソファに腰を下ろして新聞を読み始めると、クラウンス氏が書齋からラジオをとめて出て来る。そして夕食が済むとミセス・ストロウブリッジが、自分は耳が遠いからあなたがたは話していなさい、今日は自分が皿洗いは全部やってあげるから、と言うので、私たちはよもやま話をする。クラウンス氏は機知に富む冗談をいい、夫人は、日本のいろいろなことを根掘り葉掘り尋ねる。半年ぐらい過ぎた後には、もうあなたもアメリカの生活習慣に慣れたから、キスをして良いだろうと言って私を抱擁した。

私が忘れることの出来ないことの一つは、ちょうど一九五二年の七月に大統領選挙演説で賑わっていたときのことだった。いつも政治のことなど話したことのないクラウンス氏がパイプをくわえて私に大統領の選挙演説のことなど尋ねた後に言った。アメリカにはいろいろな良いことも沢山ある。しかし政治家というのはいつの世にもくだらないものだ。政治家は自分の国に都合の良いことばかり考えて、外交政策を真剣に考えない。国内政策も同じことだ。豊富な天然資源をもつ広大なこの土地で、それを濫費し、林野を切り開き、材木をどんどん燃やし、石炭や石油を掘り尽くし、それを有益に使わない。これはアメリカ人の犯した最も大きな罪だ。そして政治家はこれを反省しようとしな。クラウンス氏はいつにない激しい語調で言った。





ずっと後のことになるが、一年九カ月のミネアポリス滞在の後に私がミネアポリスを出発のとき、自動車で駅まで送ってくれたのもこのクラウンス夫妻だった。別れ際に夫人はひとつの封筒を私のポケットに差し込んで言った。「これはただの手紙だ。決して途中で開かぬように。船に乗ったら開いて読みなさい」と涙をためて言った。

注 デール・B・ハリス、津守 真著 お茶の水女子大学家政学講座4 光生館 一九七一年



# 保育の見直し — その三

## 変化する子どもたちの成長を支える

市川由利絵

一九九〇年代に入り、職員の中で「子どもが年々幼くなつてゐる気がする」そんな話題がよくあがるようになり、手洗えない、ブランコにのれない、階段をおりられない、お弁当も口に運んでもらわないと食べられないなど、時代の変化は親の過保護過干渉を招き、子ども達の成長に様々な後退的な変化をもたらしました。また、この年から三歳児の入園が増加したと共にその傾向に拍車がかかりました。そんな子ども

達をまのあたりにし、私達保育者は驚きと戸惑いの連続でした。次第に保育の中でやるべきことが増え、身体的にも精神的にも大きな負担がのしかかってきました。しかし、みんなで話し合いを重ねていくうち、こんな時代だからこそ、子ども達をしっかりと支えていくべきではないのか？ 今の子ども達にあった保育を考へるべきではないのか？ そんな気持ちが始つていくからみはじめたのです。こうして今までの保育のあり

方をふりかえる機会がふえ、新たに保育の改善を行うことになったのです。

### 変わりゆく時代を生きる子どもを支える

—一九九〇年代—

幼稚園に通う子ども達の様子やそれを取りかこむ時代の流れや社会状況をふまえながら、保育の中で大きく改善していったこと

#### ○環境問題を意識する。

・ 子どもの廃物製作は、発泡スチロールの素材はつかわない

・ ゴミを、燃やしていいものと燃やさないものに分別

・ プラスチック製品の遊具をなるべくさけ、木の遊具を使用

・ 子どもが使うタオルなどの洗濯の時に合成洗剤は使わず、石けんを使用

○アトピー体質の子どもに対応する

・ 三歳児のおやつを無添加食品にする

・ その子の詳細な情報を職員全体で把握

○体験不足の子どもに対応する

・ 遊び方、生活習慣をよりていねいに指導

○一人一人にあった保育を考える（人とかかわりが持てない、喜怒哀楽を表情に出せない、空想の世界で遊べない、砂や絵の具で遊べない、他の子が近づくとけでぶつ、数字や記号にばかり興味を持つ、など様々な子どもの成長に対応するために）

・ 保育の補佐に子育て経験のある人をつける

・ 造形表現、心理療育など、専門家のサポートを厚

くし子どもの捉え方の幅を広げる

・ 日常の保育の中の悩み、疑問を研修にとりあげ

子ども理解を深める

### 行事の見直し再び

一九七〇年代に伝統的な行事保育を子ども主体の保

育に切り替えて、二十年がたちました。子ども主体の保育は定着し、安定期を迎えましたが、常に新鮮なまなざしで行事などの内容を見直し、洗練させていかなと、マンネリ化を招いてしまいます。そうした地道な取り組みを続けることも今、私達の園にとっては大切な課題です。

○わくわく展への新たなアプローチ

わくわく展は子ども達の生活や成長を写真や作品を通して伝える毎年恒例の行事です。平成八年（一九九六年）秋頃、当時年長組を担当していた二人の保育者がそのわくわく展をひかえ、こんな話をしていました。

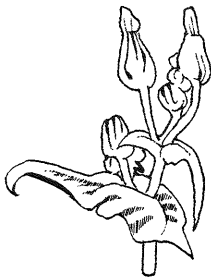
「二学期になって子ども同士のつながりがすごく深まってきたよね。子ども達の遊びを見ると、チームワークのよさが見えたり、けんかをしながらお互いに納得できるように自分で解決していたり、相手をみとめながら自分を生かせるようになったり……、わ

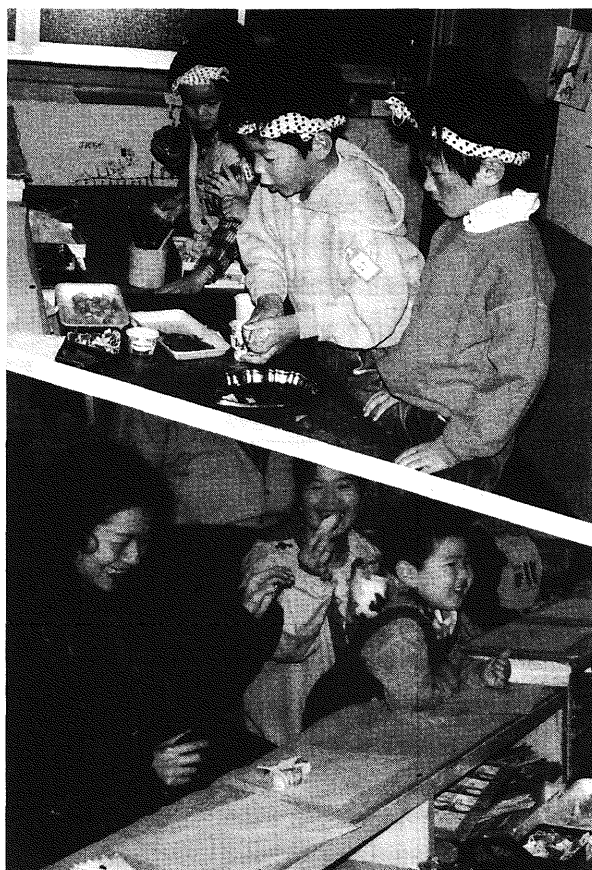
くわく展で年長組のこういう姿を見せたいね。でも、今までみたいに当日までの子ども達の園での様子を写真展示するだけだと今の子ども達の成長の様子は伝えにくいよね。何かいいやり方はないのかな？」来る日も来る日も二人でその話をしていましたがなかなかこれだ！ という案がでてこないようでした。

そんな時、職員の中から、「当日、子ども達の遊びをそのまま見せたらどうかしら？ そこからみんなに成長を感じてもらおうよ！」そんな声があがったのです。新しい発想を取り入れてみたいと思いつつもその反面では親達の反応はどうなのだろうか？ 子ども達はいつもの姿をみせてくれるのだろうか？ そんな心配もあり答をだすま

には何度も話し合いが必要となりました。

話し合いを重ねるうちに、年長の担任を中心に職員みんなの気持





ちも次第に団結していき、こうしてわくわく展は子ども達の遊びをそのまま見せるやり方に決まりました。新しい試みから四年。今では年長組のわくわく展は別名パフォーマンス・アートともいわれるようになり、

みんなこの日がくるのを心待ちにしています。では、その一部をご紹介します。わくわく展当日、子ども達はたくさんの方が集まる中で生き生きと自分の担当の活動に取り組んでいます。

た（写真参照）。また、お母様方からも「動く展覧会のように子どもの様子がよく見えた」「子ども同士で遊びを作りあげているのがわかり成長を感じた」など様々な感想をいただくことができました。今まで保育の中で私達は子どもの遊びが見栄えよくなるように、形が残るようについついルールをひいてしまっていたように思います。わくわく展を通して、そんな自分

# おすし屋さん

カウンターにはまめしほりをギュッとしめた子どもたち。まるでちびっこ職人のおもちです。「おまえ、にあうじゃん！ 本当のおすし屋さんみたい」「エへへ」と照れ笑い。そんな中、1人また1人とカウンターの席はお客さんでうまっていく。お客さんに何と声をかけてよいものか…。

「何がおいしいの？ そうね、アナゴもらおうかな」との注文の聲がかかる。「はい！！」と元氣よく返事をすると、ねんどのご飯をひとつまみ手の平にのせ、あざやかな手つきでご飯の上にアナゴをのせる。「はい、おまち！！」と、カウンターにさしだす。お母さんたちもそれを見て、にっこり微笑む。

今度は子どもたちから、「次は何にしますか？」と、声がかかる。「トロのわさび抜き」「私もください」「ウニありますか？」みんなで一生懸命につくったネタがカウンターの晴れ舞台をかざる。

「あがりおねがい」「あがりってなんだっけ」板さん同志でヒソヒソ話…。大繁盛のおすし屋さんには長い行列ができました。

※ここで取り上げたのは

年長組（五歳）の取りくみの一例です。わくわく展のやり方は学年によって、またその年の子どもの様子によっても変わります。

## ○その他

大きく改善した園行事

・ 入園式 全園児を集め

形式的に行っていた

やり方をやめ、クラ

達の保育、遊びの援助の偏りをふりかえることができませんでした。

子ども達は日々何気なく繰り返る遊びの中で少し

ずつ成長していきます。これからもそのことを大切に

ふまえ、より子ども達の生活に近づいた所で園行事を

考えていこうと思っっています。

別に設ける

・ 園外保育 子どもの活動の場を広げ、地域社会で

の保育（例、近隣の公園、図書館、美術館な

ど）を増やす。そこでの直接体験を大切にす

る。

・誕生会 子どもの発達の差を考えて、四・五歳児と三歳児をわけて行うようにする。

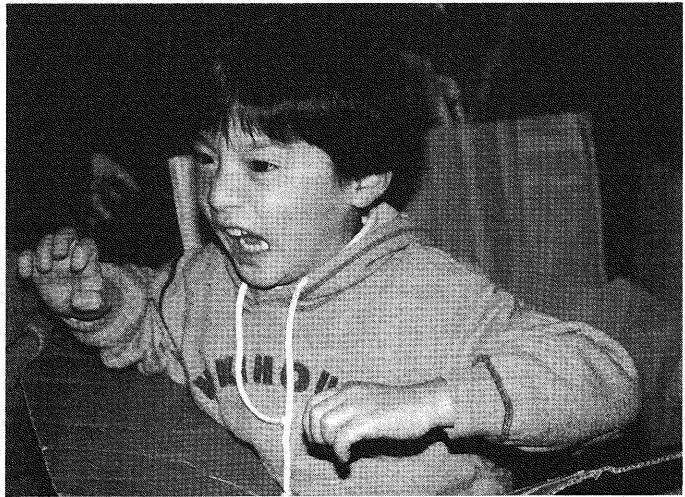
・ファミリーデー 父と子の触れ合いを願い九〇年代に新しく始めた行事。父親を園に招き子どもと一緒に遊ぶ時間を作る。また父親のための講演会や父親同士のディスカッションの時間も設ける。

・運動会 チームごとの聖火入場、形式的な開閉式などみせるためのプログラムを改善し、親も子ども十分に力を発揮し、楽しめるものに内容を変更する。

など

これから——今私達ができること——

三回（五月・七月・九月号）にわたり、『保育の見直し』をテーマとし、私達の幼稚園とその周辺のことをふりかえってきました。この二十年、時代の流れや



▲おばけやしき

子ども達の成長の著しい変化の中、私達の保育は「これでいいのだろうか？」と日々試行錯誤の連続でした。園の教育目標の一つである「どんなことに出会っ





でもしっかりと生きていけるように”というねらいは、もしかすると子どもだけでなく私達保育者にも言えることなのかもしれません。

これからも悩んだりつまずいたりしながら、私達の保育の探索は続いていくことと思います。二十一世紀の将来のことを思うと不安は募ります。しかし、目の前にいる子ども達のためにも私達は、自分の心と体の健康を心がけ、前向きな気持ちで保育をしていかななくてはと思っています。

(横浜学園付属元町幼稚園)

参考文献 『保育ライブラリーズ3 わくわく展(五才児)』

横浜学園付属元町幼稚園

# 目をこらして (6)



「かずほね、今日すごくへんなことしたんだ。」

突然娘が言い出したので、いったいどんなことだろうと  
思って聞き返すと、思いがけない答が返ってきた。

「ミツバチってこういう気持ちなんだなあって初めてわ  
かったの。」「？」

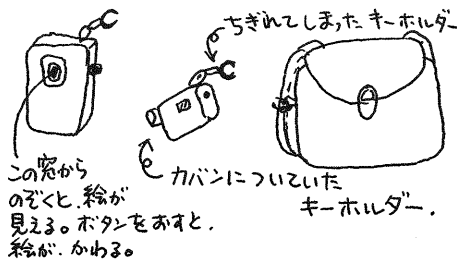
「かずほね、花の蜜吸ってみたの。甘かったよ！」

娘は、今日、初めてツツジの花の蜜を吸ってみたのだと  
いう。『新鮮な気持ちっていいな』とوراやましくなった。

何にでも興味をもち全身興味のかたまりという感じの子  
(Gちゃん)がいた。やりたいと思えば、どこへでも飛び  
込んでいくので、「やめて」とよく苦情を言われた。

ある日、お弁当の仕度をしていたら、Rちゃんの泣き声  
が聞こえてきた。Gちゃんが、Rちゃんのカバンについて  
いたキーホルダーを取ってしまったのが原因だった。見る  
と、困ったような表情で立っているGちゃんの手には、カメ  
ラ型のキーホルダーが握られていた。回りには人ばかりが  
できていて口々にGちゃんを責めていた。

「だってだって、見たかったんだもん」と泣きそうになり





# 耳をすまして



ながらこたえるGちゃん。カメラ型のキーホルダーは、中を覗いてボタンを押すと絵が変わっていく式の物だった。

「Gちゃん、見たかったんだったら見せてって言うんだよ。黙って取っっちゃダメだよ」と私が話していると、さっきまで泣いていたRちゃんが「見せてっていえば見せてあげるよ」と言ってくれた。こうして、Gちゃんは、念願のカメラをのぞいて見る事ができた。

「うわー」とうれしそうにカメラをのぞいているGちゃんの様子に、さっきまで「いけないんだ!」と口々に言っていた子どもたちの表情が変わってきた。

「もしかして、本当はみんなも見たいの?」と聞くと、「うん! 見せて!」そう言うと、ずらっとGちゃんの後ろに並んでしまった。

わがままだと叱られる子は、実はみんなのやりたい気持ちの代弁者のなのかもしれない。Gちゃんの「やりたい」に振り回されながら、『やりたい気持ちっていいな』と、やっぱりうらやましくなった。

絵と文 宮里暁美 (目黒区立ふどう幼稚園)

子どものいる暮らし―男・夫・父

## 散歩道で教えられたこと

くわ  
はら  
乗原

昭徳



### 韓国からの電話

私には一九九五年に出版した『マー君の散歩道』という呑気な題名の著書がある。隣の家の三男のマー君（当時三歳八か月）と私の一〇か月の散歩の記録である。一九九八年の三月、その本を東京で

買って読んだという電話が釜山からかかってきた。この電話を契機に、六度にわたる釜山大学校付設保育園の訪問が実現した。また、この『マー君の散歩道』は、一九九九年にはソウルにおいて韓国語訳が出版されるにいった。

## インターホンが仲立ち

一九九一年の五月二〇日、日曜の昼のこと、拙宅の玄関のインターホンが鳴り響いて、お隣の三人兄弟が遊びに来てくれた。一番下のマー君は保育園の年少児クラス、二番目のヒロ君は小学二年生、そして長男のナオ君は小学五年生であった。

幼児にとつて玄関のインターホンは、おもしろい遊び道具でもある。上の二人の兄は簡単にインターホンのボタンに届くのだが、マー君の手には高くて届かない。この日、私は庭にあったレンガを一つ、玄関外のインターホンのボタンの真下に置いた。

マー君には、ちょうど良い高さとなつて、つま先から手の指先までを一直線にして伸ばすと、どうにか人さし指の先がボタンにかかるのであった。この日から、わが家のインターホンのボタンは、マー君の冒険の対象となつた。その日のうちにも何度か鳴

り響いたが、月曜日からは毎夕のようにインターホンが鳴るのであった。

私も朝早く学校に出かけていって仕事を済ませて、夕方には家にいるようになった。それから数日間、インターホンを鳴らしてはマー君がやつて来て、わが家が上がつて遊んだ。特別な遊び道具が準備してあるというわけではない。マー君の家とはちがつて、隣の家の机の上の紙一枚、鉛筆一本、ホッチキス一個が、遊び道具になるのであった。このころ、マー君は母親の車から降りると、直接インターホンに向かつていたらしい。

## 初めての散歩

インターホンが鳴りはじめて五日目の、五月二十四日の夕方のことであった。

私は、裏庭で土運びをしていた。その時、玄関のインターホンが鳴つたのであった。マー君は慣れた

足どりで、二階に登っていく。私の方は、泥まみれの手足で家の中に入ることもかなわない。そこで私は、「きょうは、お外よ」と叫ぶことになった。この一声をきっかけに、マー君と私は家の近くを歩くことになった。初めての散歩である。

田んぼのそばまで行くと、水道の蛇口にとりつけられた青色のビニールホースの切れ端が転がっていた。マー君は、それを手に取ると、田んぼの水の中に入れてジャブジャブと掻きまわしはじめた。これがおもしろいらしく、しばらく遊び興じた。

私も大人としてのプライドがある。数日後、マー君のいないときに、ホースでジャブジャブとやってみた。水の抵抗があつたり、音がしたりして、けっこう面白いことを発見した。幼児の喜ぶ遊びが、生活の身近にあることを教えてもらうことになった。

さらに細い畦道を歩くと、大きな池の水面が見えた。なんと目の前には体長五〇センチメートルを越

える朱色の鯉と、紅白に黒の模様の鯉がぼっかり浮かんでいるではないか。私は指さしながら「あそこに鯉がいるよ」と小さくささやいた。するとマー君も、さも感

心したように「おるねえ」と、小さな声でささやいたのであつた。私がささやきかけると、マー君がささやき返す。第二に、幼児のつかう言葉の不思議さを教えてもらうことになった。

畦道に並行して流れ下る溝には、澄んだ水が流れている。マー君は足もとの草の葉をちぎって、溝に投げこんだ。そして「舟じゃ」と叫びながら、こんどは流れ下る草の葉の舟を追いかけた。池からの流れ込みでは、浮き沈みする草の舟を眺めた。投げ込んだ草を舟と見立てて楽しむ「遊び事」のおもしろさを私も体験することになった。

一本のホースの切れ端、二匹の鯉、投げ込んだ



草。この三つの物を使って楽しむ遊び方を、私は三歳八か月のマー君から教えてもらったのであった。

それは一九九一年五月二四日のことであった。その日が、マー君と私の最初の散歩の日であり、「散歩記念日」となった。二人は、九年後の今でも散歩に出かけることがある。

### 散歩道で教えられる

甲羅の長さが三〇センチメートルを越える巨大なアカミミガメを捕まえたり、種々の色どりのチョウを見て、たくさんのことを教えられた。また、マー君が小学校に行くころには、二人で数々の珍しい出来事にも遭遇した。

① 広い池の水面に突き出た配水用のはしごの手すりに、魚の小さな鱗が付着している。これは、カワセミが小魚を捕った直後に、手すりに打ちつけて

殺して食べた跡であった。

② 池に棲息するザリガニは、夕方になると池から這い出て、夜中のうちにいったんは溝の上流に登り、明け方には下流にくだっていく。多い時には一晩に五〇匹が下っていく。

③ うららかな春の日の午後、池のカメたちはネコヤナギの幹や枝で甲羅干しをする。

④ この散歩道ではヘイケボタルが飛ぶ。成虫からは予想すらできないホタルの幼虫も発見した。一〇メートルばかり離れた別の水系では、大きなゲンジボタルが乱舞する。

⑤ 冬の日、体長四三センチメートルもある巨大なウシガエルを捕獲し、近所の人に見せて歩いた。

⑥ 池のそばに座って二人で話していると、空からウスバキトンボの死体が降ってきた。これは、獲物の食べ方に慣れていない若いツバメが食べ損なって落としたのである。

⑦最近、この池の下流の溝が、シジミ貝の群生する  
住み処であることを発見した。

毎年、夏から秋に群れ飛ぶ茜色のトンボはウスバ  
キトンボ（薄羽黄とんぼ）であった。これはマー君  
が気付いて、後で私が教えてもらった。また、マー  
君の疑問に応えたり、二人で調べたりする中で、私  
はたくさんの自然の事物の名前や性質などを教えら  
れた。

### 散歩に参加した子は五〇人

散歩がはじまって満九年が過ぎ、回数も七〇〇回  
を越えた。マー君と私がいつも一緒に散歩するもの  
だから、ある女兒は私を「マー君のおじちゃん」と  
呼んだこともある。

この散歩が満九年を迎えようとする二〇〇〇年の  
五月二二日（日曜）のこと、中学一年生となった  
マー君と久しぶりに散歩をすることになった。私の

方から電話をかけて都合を尋  
ねた。「散歩に行かないかね  
え」との誘いに、マー君は  
「いいですよ」と大人びた丁  
寧な返事をした。礼儀正しく、すっかり大人の言葉  
であった。

私は帽子をかぶり、メモ用紙をもって外に出る。  
時刻は一四時二〇分、気温は二七度である。初夏の  
太陽がまぶしい。マー君宅のインターホンを鳴らす  
と、マー君が出てきて、「長靴をはこうね」と言っ  
た。乗原宅の玄関の虫とり網をマー君が持った。

池の土手は、初夏の雑草の緑におおわれていて、  
その中にピンクのアザミの花、黄色のウマノアシガ  
タの花がのぞく。その日のマー君との散歩で出合う  
ことになった物は次のとおりである。\*印は、私の  
目の前で、マー君が虫とり網で捕獲した物である。

ヒメウラナミジャノメ\*、アゲハ\*、ベニシジミ





\*、ツマガロヒヨウモン\*、ヤマトシジミ、クロアゲハ、モンシロチョウ\*、キチョウ、モンキチョウなどの蝶の仲間。

シオカラトンボ、ムギワラトンボ、コオニヤンマ、ハラビロトンボなどのトンボ類。

アオサギ、ツバメなどの鳥類。池の周囲の岸辺は、キシヨウブの花盛りである。

マー君が水の少なくなつた池の底をみて、「カメが歩いた跡がある」と教えてくれた。よく見ると、カメが腹をこすつた幅の広い跡が一本だけ、池の中央の方向に伸びている。

二年前のこと、マー君宅の向こう隣にミカとジュリの家族が引っ越してきて、すぐに散歩に加わつた。最近では夕方などに、ミカ（小一）・ジュリ（幼稚園年少）・ナミ（小二）たちを相手にボール遊びや自転車遊びをしているマー君の姿を見ることもある。

そのほかに、マコト・カナ、ユウ・シヨウタの各きょうだい（四人とも幼児）や、マイ・コマサきょうだいと遊び仲間の兄弟（四人とも幼児）、それにタエ（小二）・チエ（保育所年長）・リサ（小一）が散歩や遊びに加わることもある。

マー君との散歩が始まって満九年になるが、その間に一度でも散歩に加わつた子どもは五〇名を越える。散歩のメンバーは変化するが、これから後も散歩は止みそうにない。

（山口大学）

# 元氣が出る、楽しめる文化財保存

―カナダでの体験から―

波多野 純

## 裁判所を研修所に

私の勤める大学が、ひよんなことからカナダの文化財を手に入れることになったのは一九九五年、阪神大震災の年。場所は、クローズドネストパスと言う名の、人口六五〇〇人の小さな町。冬季オリンピックが開か

れたカルガリから南へ二五〇キロメートル、アメリカ国境に近く、カナディアン・ロッキーの東側にあたる。広々とした丘陵地帯に、かつては炭坑で栄えた集落が点在する。この町の中心街ブレアモアの町はずれに、一九二三年に建てられた裁判所兼警察署があった。その役目を終えた後も、アルバータ州の文化財に

指定され、町の文化財団が管理をし保育園や博物館として利用されてきた。しかし、財政的に維持が難しくなり、ベッド&ブレイクファーストつまりペンションに売られそうになっていた。町の人たちの何人かが、町の歴史を見つめてきたシンボルが失われるのを心配し、教育的な施設として使ってみないかと誘ってくれた。

建物は、地下一階、地上二階、延べ一八〇坪。構造は、ホールブリックという煉瓦で作った穴あきのブロックを積み上げ、木造の屋根を掛けたもの。ホールブリックは一九二〇年代に流行した素材。一階に裁判所の法廷と警察署の事務室、二階に警察署長の住居と警察官の宿直室、地下には留置場と機械室がある。左右対称の外観は、落ちついた雰囲気を感じさせている。入口の上には、アルバータ州の旗がデザインされている。

これを文化財として大切に保存しながら、大学の研

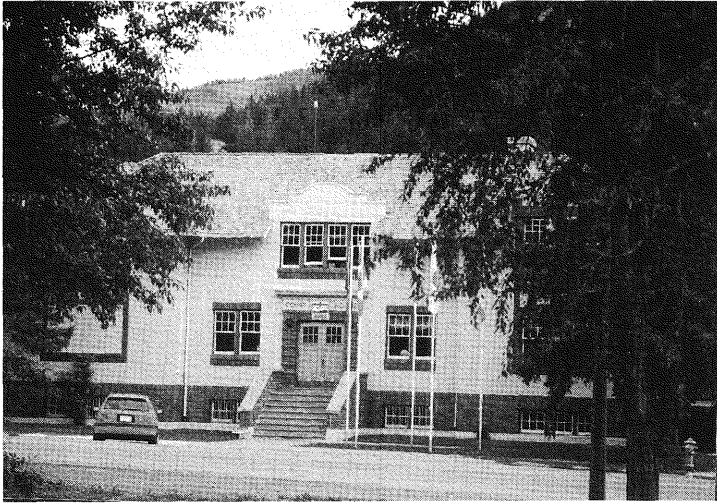
修所として利用できるように改修することになった。

### 留学プログラム

付属の工業高校を卒業した学生が二〇人ほど、まずここで一年間の研修を積む。英語ばかりでなく、数学やコンピュータ、さらにアウトドアでの体験など豊富なプログラムが組みこまれている。これが終わると、一〇〇キロメートルほど離れたレスブリッジの短期大学へ進み卒業資格を得て、私たちの大学へ戻ってくる。カナダの大学へ進む学生もいる。海外で、ホームステイしながら自分の責任で生き抜いてくると、驚くほど逞しく大人になって帰ってくる。

### 元気が出る文化財保存施策

改修の方針は、アルバータ州歴史文化財団のリノ・パソン氏、州が認めた修復建築家のロバート・ヒラノ氏、町の建設業者ケン・ソレンセン氏、研修所長フィ



▲改修なった日本工業大学カナダ研修所（ブレアモア・コートハウス）

ル・キャン氏そして大学から赴いた私たちが、繰り返し会議を開き、図面をやりとりして決定した。基本は、文化財としての価値を損なわないこと、火災の際に安全に避難できること、公共施設として車椅子等の利用者に不便を感じさせない設備を整えることなどである。

この議論のなかでびっくりしたのは、歴史文化財団いわばお役人であるリノ・バツソ氏の対応。いかに補助金を出せるか、積極的に提案してくれる。たとえば、当初は木のフローリングであった床の上に、現在はプラスチック系のタイルが貼つてある。すると、このタイルを剥がして床を磨き元の姿をよみがえらせると、仮に二〇〇ドル掛かるとする。いっぽう、このタイルの上にカーペットを貼つてまえば一五〇ドルで済む。しかし、前者を採用し木の床を復原すれば文化財修理にあたるので、州から半分の一〇〇ドルの補助があるのでその分が戻ってくる。「どちらにしますか？」

と私たちに判断を委ねてくれる。当然、前者を選ぶ。工事が始まると、タイル剥がしは単純労働だからと、高齢者福祉事業団の安い労働力を紹介してくれる。

この半額補助はとても良い方法だと思う。建物を修復しようとする所有者はまず二〇〇ドル支出しなければならぬ。しかし、半分戻ってくるのだから助かり、得をした気分になる。いっぽう、役所は援助した額の倍の経済効果がある。景気浮揚策として有効だと思う。

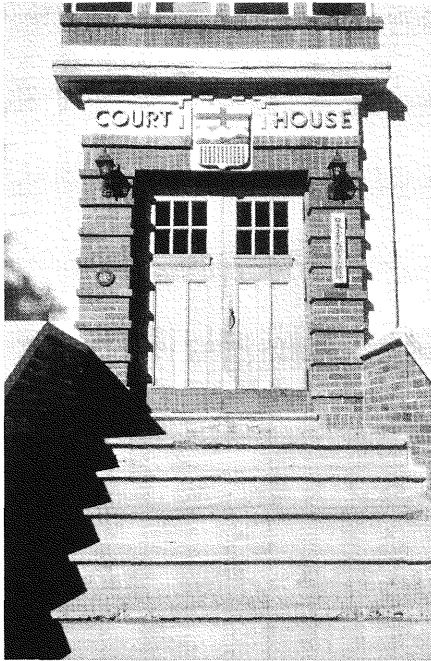
最近、日本では、規制緩和という言葉をたびたび耳にする。役所の任務は規制することであり、それを少し弛めても上から規制しようとする姿勢には何ら変わりがない。規制緩和とは、上下関係を前提にした傲慢な言葉だと思う。カナダの発想はそれとまるで違う。文化財保存も市民的合意に基づくものであり、それを支えるのが政府であるとする姿勢

は、日本的規制の対極にある。

### 君のおかげだ

マイナス四〇度を越す冬にも改修工事は続けられ、一九九六年六月一日に竣工を迎えた。地元の中高校生のジャズコーラス、レスブリッジ日本人会の紅葉踊

◀ 正面入口 アルバータ州のマークが見える



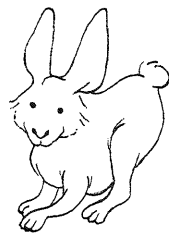
りなど楽しいイベントが繰り広げられ、ランチが振る舞われた。巨漢のリノ・バツソ氏は母親を連れてカールガリから駆けつけ、こんなに楽しい仕事はなかったと喜んでくれた。ロバート・ヒラノ氏の私へのプレゼントは、バット・マンのシールセット。ケン・ソレンセン氏は壇上から、職人さんたちひとりひとりの名を呼び、「君の塗ったペンキの色はすばらしい」、「君の作った手すりはびくともしない」と感謝の言葉を述べ、職人さんたちもそれに応えて手を振った。そして私を指さし、「文化財保存のあるべき姿を教えてください」と言われた時は、うれしいやら照れくさいやら。八人で合計四〇分間のスピーチが、あんなに楽しく退屈せず、予定通りの時間で終わるとは……。形式主義、偉い人へのゴマすりのスピーチを聞き飽きている身には、うらやましい限りである。

式典の後、法廷では一九三〇年頃の裁判が本物の裁判官を迎えて演じられた。馬車による町内ツアーも実

施された。

### 災害と復興の博物館へ

一九〇一年、この町はフランクスライドと呼ばれる大規模な土砂崩れを体験している。石炭の掘り過ぎが原因らしく、集落がひとつ埋没し、たくさんの人が亡くなった。現在も樹木がまったく生えない岩だらけの崖が、その爪痕を示している。裁判所が完成したのは一九三三年、大正十二年、関東大震災の年である。そして、阪神大震災の年に大学はこの建物を手に入れた。私は、この建物の一部を、災害と復興に関する博物館にできればと思っている。





▲開所式での模擬裁判

## 公園にミニSSLを

あれから三年経った昨年の秋、私たちは久しぶりにカナダを訪れ、ミニSSLの駅舎を造ることになった。研修所長のフィル・キャン氏は、研修所とその学生が町にうまく溶け込めるよう、日々気を遣ってくれている。記念コインやバッチ、タオルやカーペットなど研修所をあしらったデザインのグッズもずいぶん増えた。

彼からこんな提案を受けた。研修所のすぐ後ろに、ギバス・パークと呼ばれる公園がある。ギバスとは、ボランティアとしてこの公園を長年管理してきたおじさんの名前。ギバスさんも高齢になり、公園の管理からは引退したが、今でも犬を連れて散歩にみえる。研修所の学生たちも、この公園でランチをとる。そこで、クロウズネストパスの町役場からこの公園を年間一ドル（形式だけ、つまり無料）で借用し、付属高校

が製作したミニSLを走らせてみないかというのだ。付属高校では実習をかねて、ミニチュアの蒸気機関車やディーゼル機関車を製作し、全国各地の公園に提供している。世界ミニSL大会を大学で開催したこともある。

### 駅舎を自分たちで建てる

鉄道の敷設は付属高校の先生たち、駅舎の建設を私たちが担当することにした。カナディアン・パシフィック鉄道が、この町まで延びたのが一八九八年。現在は、貨物専用鉄道だが、かつては乗客も乗せていた。駅舎は残っていないが、隣のファーニーの町の駅舎は、美術館とレストランに転用されている。

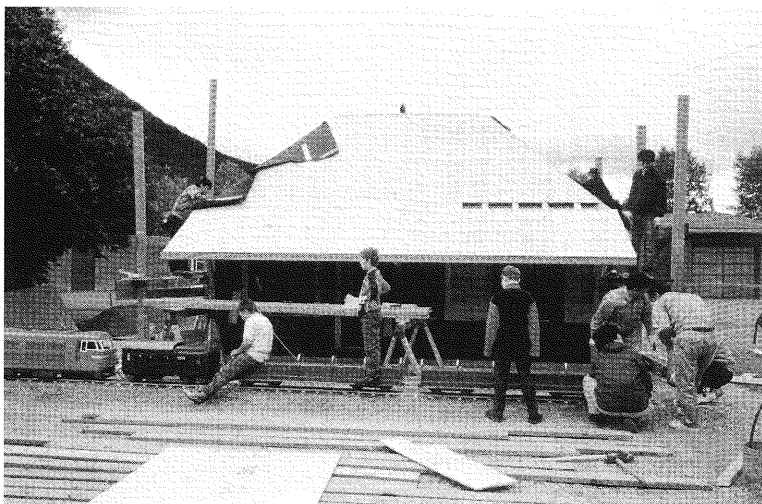
ブレアモア駅の図面や古い写真も見つかった。駅舎は、縮尺二分の一で作ることにした。図面を描き、模型で細部を検討し、法的手続や材料の手配を依頼した。

黒津高行先生と私、それに大学院生五人は九月二〇日、バンクーバー経由でカルガリに到着。フィル・



キャン氏の出迎えを受け、研修所のバンでクロウズネストバスへ。翌朝から早速作業に取りかかる。指導は、ゲリー・カーペンター氏。地元の大工さんで、姓は本当にカーペンター。裁判所修復以来の友人である。彼がすでに、地面に砂利を敷き固め、土台を据えてくれていたので、壁のフレームから作り始めた。2×4（ツーバイフォー）構法は、日本の構法に比べると易しく、すぐに作業に取りかかれる。フロンティア・スピリッツとは何でも自分でやることであり、自分でできるように工夫することだとよく分かる。2×4構法も、ハンマーと鋸が使えれば作業ができる簡単な構法である。もともと、日本とは逆に押して切る鋸は、慣れるまで使い方が難しい。黒津先生は、学内の





▲駅舎、屋根ができ上がり、列車の試運転が始まる

建築技術研究センターでの作業経験が豊富で、電動工具の使い方などは抜群、学生の尊敬を一身に集める。

二日目はゲリー氏の工場で、原寸図を引き、小屋組（屋根を支える木組み）の加工、三日目は屋根の組み立て、四日目はシダーシングル（杉の割板）による屋根葺き、五日目に庇の加工と外壁の一部の取付け、と作業は順調に進んだ。滞在期間が短かったため、完成には至らなかったが、最後には列車の試運転もでき、充実感のある時間を過ごすことができた。

### 体験から学ぶ

大学での建築教育は、なかなか実物と結びつかない。私たちの大学の特長として、設計製図や実験など実物に触れる機会が多い。しかし、設計から施工まで一貫して体験できるチャンスはなかなか巡ってこない。金槌を握りしめていた学生が、金槌は重力に逆らわずに振り下ろす道具だと分かるのにさしたる時間は要し

なかった。「ものづくり」は体験からしか学べない。

九月末、到着した日は気温二五度で少し汗ばむくらいの陽気。帰る日の朝起きてみたら、一面の銀世界で小雪が舞っていた。夏から一足飛びに冬である。この激しい気候の変化と同じように、一緒に作業をした学生たちも大きく変わった。最初は、英語で挨拶もできなかったのが、帰る頃にはゲリー氏や地元の学生と作業を打ち合わせ、ニコニコと談笑するようになった。フィル氏の三人の息子たちも手伝いに來てくれた。大勢で足場の一カ所に乗ってしまい崩れ落ちることもあったが、怪我には至らなかったから、何もなかったことにしよう。

寒い冬が終わり、雪が解けると、ゲリー氏は追加の作業を始めてくれた。駅舎の前に舞台をかねたプラットホームを造り、ピクニックベンチとテーブルも私たちのデザインに沿って製作された。樹木や芝を植えれば完成である。

七月一日は、カナダの建国記念日である。この日に、コメモラティブ・プラザと名付けられたこの公園も、開園式を迎える。地元の子どもの笑顔が楽しみである。

(日本工業大学)

## 幼稚園生活の中での

# 自分のもの、みんなのもの

伊集院 理子

昨年度、久しぶりに三歳児を担当した。家庭から外の世界に踏み出して、同年代の子どもたちと初めて生活を共にする子どもたち、集団生活ということでは何色にも染まっていない真っ白な子どもたち。その子どもたちと共に、どういう生活を紡ぎ出していくか、担任として大きな責任を感じつつも、毎日

心をときめかせながら過ごした一年であった。たとえれば、雪が降った朝に早起きして、新雪の雪に一步自分の足跡を刻んでいく時の、あの何とも言えぬ新鮮で心が弾む感覚だろうか。自分のちよつとした関わりが、子どもの心の中にくつきりと形を残していく感じで、その手応えに心躍らせながらも、

そうだからこそ、保育者としての自己満足、自分自身の達成感にのみ陥らないように、子どもたちと共にといいことを、肝に銘じて過ごしてきたつもりである。

そんな思いを持ちながら、一年間、心から子どもたちとの生活を乐しみながら、考えてきたことがいくつもある。その中の一つが、幼稚園生活の中でのものの位置づけに関わることである。

### 一人一人のドレス

担任した子どもたちは、特に女兒はイメージが豊かで、どんどん自分たちで遊びを作っていける子どもたちであった。ままごとコーナーには、色々な布が置いてあり自由に使えるようになっていた。

ある時、女の子たちがありあわせの布を腰にまいて洗濯挟みでとめて、それですっかりドレスを着たお姫様になりきって過ごしている姿を見て、子ども

の発想の豊かさ、柔らかさに目をみはる思いがした。

三学期のある日、ご馳走を作ってパーティーをしようという話もちあがっていた。それをどうにかして盛り上げたいと思った私は、ありあわせの布でお姫様になりきれぬ子どもの柔らかさを潰してしまうことになるかもしれないと危惧しながらも、パーティーごっこが華やかに盛り上がるには、もう少し子どもにとって魅力的なものが必要なのではないかと考えた。そこで、カラービニール袋を出して、「これでドレスを作るのはいかがしら」と提案してみた。子どもたちは飛びついてきて、あつというまにほとんど全員の女兒にその日のうちにドレスを作ることになった。

出上ががったドレスを身につけて、子どもたちは、テープから流れる音楽に合わせて、舞踏会のイメージで踊りに興じたり、食事をする席も設けら

れ、すましてごちそうを食べたりしていた。

そのドレスは、自宅に持って帰っても次の日にはまた幼稚園に持ってきてもらって、個人が所有するものとして、使いたくなかった時に、自分の引き出しの中から個々がひっぱり出して、大事に使うものとして位置づけていった。これまでも子どもたちの要望に応じて、色々なものを色々な素材で作ってきたが、このような形で、同じ物をみんなが自分持ちのものとして持つことは初めての体験であった。色の違いこそあれ、お友だちと同じ物を持って、それ自身につけ、自分の大事なものとして繰り返して使うという体験は、子どもたちにとって、とても嬉しいこと、大きな意味のあることであった。それから数日間、ドレスを持ち出して着てみたり、脱いでみたりと、一日に何度となく着脱を繰り返かえてドレスを着ることを楽しんでいた。

### ちようちよごつこの遊び

ドレスも少し治まってきた頃、年長女兒数名が三歳児の保育室に来て、ピアノを弾いたり、鈴、トライアングルなどを演奏したりして、出前音楽会をしてくれた。せっかく年長児がよい刺激を与えてくれたので、しまつてあつた楽器を持ち出して、「大きい組さんみたいに音楽会をしよう」と子どもたちに持ちかけてみた。すると、子どもたちはすぐに「やる、やる」と乗ってきた。私がひくピアノに合わせて飛んだり跳ねたりして踊ることは大好きな遊



びの一つで、一学期から繰り返しやってきた。ピアノに合わせて音楽会をするのもよかったが、せっかく初めて取り組む音楽会ごっこなのだから、これまでとは違って、子どもがすつと親しめるようなクラシックのテープにあわせてやるのはどうか、ふと思った。それでテープを探してみると、「おもちゃ

のシンフォニー」と「ちようちよ変奏曲」が一緒にはいっているテープが見つかった。それを流して、私も子どもたちと一緒に楽器を演奏する役になって、音楽会ごっこを始めた。テープを巻きもどして最初から繰り返してやっているうちに、子どもたちの中から「ちようちよからがいい」という声が出てきた。そこで、「ちようちよ変奏曲」だけを何回も繰り返して、その曲に合わせて楽器を演奏した。

次の日も、「ちようちよしたい」というので、そんなに「ちようちよ」がいいなら、もつとその遊びがおもしろくなる手だてはないかと考え、黄色のカ

ラービニール袋で蝶の羽を作って、それを背中につけて演奏するようにしてみた。私としては、音楽会の彩りぐらいにしか思っていなかったのだが、蝶の羽をつけると、楽器を演奏することよりも動いてみたくなって、子どもたちは楽器を置いて、ちようちよになってはばたき出した。

この「ちようちよ変奏曲」というのは、元気よく飛んだり、羽を休めてじつと静かにとまったり、更に勢いよく飛んだりと、音楽の調子に合わせて自然に動きの変化をつけたくなるようにうまく構成されている。子どもたちは、このちようちよごっこに夢中になっていった。「わたしも、ちようちよになりたい」と何人も言ってきた、私は急いで黄色い羽をいくつか作った。その羽をつけて、子どもたちは嬉々として音楽に合わせて飛び回った。

その日、「ちようちよの羽をうちに持って帰りたい」という声もあがったが、私は、その時、この蝶

の羽は個人の持ち物にたくない、この遊びに属するもの、みんなのものとして位置づけたい、と感じた。それで、「またちようちよごっこをする時にすぐ使えるように、これはここに置いておきましょう」と子どもたちに持ちかけた。すると、案外すんなり子どもたちは納得して、羽をその場所に置いてくれた。

次の日、子どもたちは朝来るなり「ちようちよする」と言つて、数人が一斉にちようちよになりたがつた。そこで、咄嗟に、ちようちよだけでなくもう一つ役があるといいと思つて、「花の精も出てくるといいんじゃないかしら」と持ちかけ、子どもたちが魅力を感じそうなピンク色のうすがみで花の冠を作つてみた。すると、「花の精になりたい」という声が次々上がり、花の冠づくりに追われることになった。蝶の羽と花の冠をそれぞれ五、六個ずつ作つて、それ以上は作らないようにした。

その時やりたいと思つた子どもたちが集まって、置き場所から変身グッズを取つて、花の精やちようちよになったり、その役を交代したり、メンバーが入れ替わつたりしながら、この遊びを楽しむようになっていった。蝶の羽も花の冠も、個人に属するものとしていたら、遊びの展開はこのようにはいかなかったと思われる。

その後、「お遊戯室の舞台の上でしたい」という声があがり、それぞれちようちよや花の精の身仕度をして、テープを持ってぞろぞろと遊戯室まで遠征して、遊戯室の舞台でこの遊びを楽しむようになった。

### 年中児に進級してから

三歳からの持ち上りのメンバーに加え、男女あわせて十五名の新メンバーが加わり、年中の新学期がスタートした。最初のうちは、新メンバーの一人

一人と少しでも早い段階でどうやったらいい関係を結んでいけるか、ということ、私の頭はいっぱいであつた。一週間ちよつとして、少しずつ生活のペースがつかめるようになった時に、三歳からの子どもたちから「ちようちよしたい」という声があつた。大事に蝶の羽も花の冠も取つて置いてあつた。旧メンバーにとつては慣れ親しんできた遊びを、この新学期の段階で出すことは、新メンバーにとつてどうなのか、一瞬迷つた。しかし、この遊びは、誰でもやりたい人がやりたい時に共有財産の変身グッズを身につけて参加できる遊びとしてクラスの中に位置づいていたのだから、新メンバーを迎えずぐであつても、新メンバーをも仲間に取り込んできつと展開していつてくれるだろう、と私は思つた。そこで、「先生、大事に大事に取つておいたからね」といつて、蝶の羽と花の冠を出してみた。すると、ぱつと蝶の羽をつけて、三歳からの人たちが

音楽に合わせて飛び回り始めた。その様子をびつくりしたように見ていた新入の人たちに、「これをつけて一緒にやってみない」と誘つて、私も花の冠を頭につけて、その子たちにも花の冠をかぶせてあげて、遊びの輪の中に飛び込んだ。手のひらを花の形にしてゆらゆら揺らして花の精の役を演じている私の傍らで、初めのうち、新入児は呆然として周りの様子をみているだけであつた。しかし、だんだんこの遊びの楽しさが伝わつてきて、私の真似をして花の精を演じるようになっていつた。新入児の中でも積極的な人は、花の精よりちようちよの方がおもしろそうと感じ取り、ちやつかりちようちよの役と代わつていつた。そうなると、「わたしもちようちよがいい」といつて声があがつてきた。新入児の人たちもやりたい役ができるように、急いで蝶の羽をいくつか追加して作つて、新入の人たちもちようちよになれるようにいつた。



花の冠から思いついたのか、新人園児の一人が「ドレスを作りたい」と言いだした。その要求にも応えてあげたいとも思ったが、分身の術が使えたらどんなにいいかと思う忙しさの新学期、ここでドレスを作り出したら次々「作って」となるのは目に見えていた。そこで布でできているドレスがあつたので、「こんなのあるけど、どうかしら」と投げかけてみたが、イメージが違ったようでそれはそのままになってしまった。

保育後、ドレスを作つてという子どもの要求に応えきれなかったことが、気になった。それと、なんとなく三歳からの人たちの方が勢力的に蝶の役をとってしまう状況が今後も予想されたので、花の精の役をもつと魅力的なものにして、二つの役が同等の魅力をもつたものにする事で、選択の幅を広げられるようにした方が良いように思われた。そこで、花の精のドレスを作ることを思いついた。保育

者が、子どもの目の前で、作ることに意味もとても大きいとは思うが、その時間を保育中に取る余裕はないので、あらかじめ作っておくことにした。その際、子ども自身が保育者の手を煩わせずに自分たちで着脱ができるもので、花の冠とセットになるものにしようと考え、冠の花の色と同じピンク色のビニール袋でウエストをゴム仕立てにした短めのスカートで冠の数だけ作っておいた。

次の日、ドレスを作つて欲しいといつていた新人の人に、「こういうの作つただけかどうかしら」と持ちかけると、イメージにあつたようで、スカー



トと冠をすぐに身に着けた。それを見て、「わたしも」と次々言ってきたも、あらかじめ準備をしていたので、その要望にすぐに対応することができた。

その日は、魅力的になった花の精の役が人気を集めたが、動きの変化ということでは、蝶の役も捨て難く、両方の役があまりかたよることなく、この遊びを新旧入り交じって楽しんでいた。

それから、大体毎日、他の遊びをしていたかと思ふと、誰かが変身して、それを見て数人変身して、変身しただけで状況を共有しあえて、それだけで意気投合して楽しんでる姿がみられた。友だちと同じものを身につけて音楽に合わせて体を動かす体験は、慣れない環境で緊張していた新人の人たちの心と体をほぐすことにもつながっていった。

このように振り返ってみてみると、同じビニール袋で作ったものであったが、位置づけが違っていた

ことがわかる。最初のドレスは、幼稚園生活の中で大事に使う自分のものを持つ、という意味があった。お友だちと同じようなものでも、それは他のものとは全く違うたった一つしかない自分のものなのである。そういう自分のものを持つということも、幼稚園生活の中ではとても大切なことであろう。しかし、全て幼稚園の中で作ったものが個人に属するものとしての位置づけしかなかったとしたら、たまた一つの自分の大事なものとしての意味がどんどん薄れ、所有欲のみがいたずらに増大していくだけになってしまったかもしれない。

時期をそう違えずに、双方とも保育者の方から持ちかけ同じ素材で作ったものであったが、その遊びにとつてももの持つ意味の度合い、遊びの展開の可能性を、保育者として直感的に感じ取って、前者は個人に属するもの、後者は遊びに属するものとして位置づけた。

これまでも、年長を担任していた時など、みんなで作ったもの、保育者が作ったものが、例えば劇遊び用のものといったように、遊びに属するものとして位置づくことはよくあった。

それに比べ、年少の場合は、自分の意識の中で、個々の要求に応えるということがまず先行して、物を作っても、あまり意識することなく個に属するものとしての位置づけをしてきたように思う。今回、自分の中でひらめきのように、作ったものをちよちよごっこに属するものとして位置づけたいという思いが湧きあがり、その思いをそのまま子どもに働きかけてみた。そうしたら、あっさりその位置づけがみんなに受け入れられ、前述したように、ちよちよごっこの遊びは次々と発展していった。遊びの発展過程を熟考してみても、あの時の直感は間違っていないと確信する。

とはいえ、ものが何でも遊びに属するもの、みんなのものになっちゃったなら、自分のものを工夫して作ろうという製作意欲や自分にとってかけがえないものとして大事にする心などを育てていくことは難しいだろう。個人もちの大事なものを体験した後だったから、みんなのものがすっと受け入れられたのかもしれない。

幼稚園の毎日の生活の中で、子どもたちには、自分のものもみんなのものもどちらも必要なのだろう。保育者としての自分の直感、子どもたちの反応をしっかりと見すえながら、さらにももの位置づけについて意識して過ごしていきたいと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



子どもの本から

## 父の記憶を集めた物語

皆川美恵子

一九〇〇年、あるユダヤ人家族が迫害を逃れるために、帝政ロシアからアメリカ合衆国に渡りました。カナダ国境に近いミネソタ州ダールズで、家族は生活を開始していきますが、一九一八年、死者を数多く出しながらインフルエンザが猛威をふるって大流行します。五人の子どもを抱えた夫婦は、マー

ベンという一人の男の子だけでも生き延びさせ、新天地で根づいて行ってほしいと、ある決断をします。十歳のマーベンを、インフルエンザが伝染しようもないような、森林が果てしなく続く北の地へ避難させたのです。父の友人が木材の伐採の仕事をして

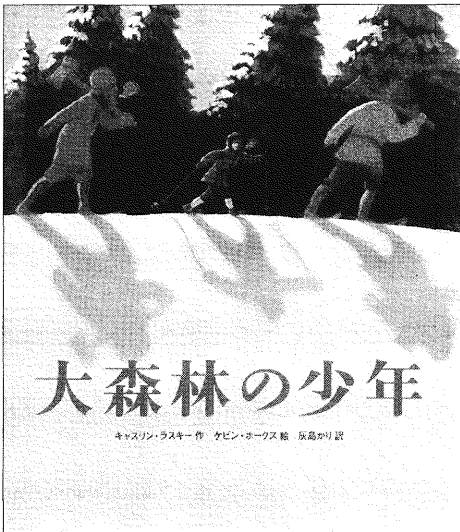
いました。その伐採現場へ、マーベンを送り込んだのです。それもマーベンがある仕事をするために。一体、十歳の子どもが何の仕事ができるというのでしょうか。マーベンが計算が得意ということを知っている父は、帳簿係の仕事ができると判断したのでした。

マーベンは母親に、父親の古いオーバーを仕立て直してもらい、裏にはビーバーの毛皮をつけてもらいます。また、耳あてのついた帽子も作ってもらいました。別れの駅でマーベンは、父親から六歳の時にプレゼントされた、父手作りのスキーを手渡されます。大森林へと向かうこれからの旅は、汽車に五時間乗り、到着した駅からはさらに八キロの道を、スキーで滑って行かなければならないからです。

地平線に森の黒い筋が見えるだけの、まっ白い世界に一人降り立ち、マーベンはスキーで森を目指します。星が輝き出す夕暮れ時、やっと伐採現場にたどり着くことができました。マーベンの仕事は、き

こり達が伐った木材の伝票を整理して帳簿につけることでした。そしてもうひとつ、朝寝坊をしている、きこりのジャン・ルイを起こすことでした。カナダから木を伐るために来ているきこり達は、フラ

◀ 『大森林の少年』 キャスリン・ラスキー作  
ケビン・ホークス絵 灰島かり訳  
あすなろ書房 一九九九年







▲「だれも死んでない」マーベンはそっとくり返した。  
「病気は、終わったの」母さんが言った。「そうして、うちの息子がやっと帰って来たわ!」

つくることだということです。そして集められた記憶を誰もが利用できる共有の財産にしていけば「地球の文化の本当の豊かさや歴史の多様性を知ることができる」と述べています。

この絵本は、ユダヤ民族の、ある家族の記憶の物語です。父親が語る物語を聞いて育った娘は、父の記憶を自分の記憶としても定着を果たしています。

私には、父の記憶を大切に保持する子どもものあり方が、何とも温かく、ユダヤの家族文化のきらめく財宝を垣間見たような驚きを感じました。そして、このような美しい絵本として形が誕生した時、地球上の私達すべての記憶として共有されることを、しみじみと実感するのです。

(舞々同人)

# 編集後記

昨秋十一月号から、金田利子先生に「子育て支援」について連載していただいています。今月号には、その連携は、支援する―されるを越えて相互支援の関係になっていくところらに特徴があると書かれています。

そんな折に、「江東区子ども家庭支援センター」の見学会に参加しました。この施設は、「保育園を地域の子育てセンターにしよう」ということを早くから実践されてきた新澤誠治氏を所長として、昨年六月に開設されました。このような施設は区内にはまだ数箇所しかないようです。

区民館の三階でエレベーターを降

りるとそこはもうセンターの入り口でした。遊べる、授乳ができる、昼食がとれる、くつろげる、学べる、情報を得ることができ、ボランティア登録ができるなど、乳幼児と共に訪れる人へのいろいろな工夫がされていました。

新澤氏はこのセンターを（サービ

スをする―されるという場ではなく）、**「ふれあい・学びあい・支えあい・分かちあいのひろば」**にしたいとおっしゃっていました。この**「ひろば」**という言葉には、場所とそこに集う人の両方が含まれているようでした。

集う場所があり、相互支援のイメージをもつ人がいて、その人がみんなを巻き込んで、それを実現していくのが子育て支援なのだと思います。

(A)

## 幼児の教育

第九十九巻 第九号

(二〇〇〇年九月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十二年九月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8601 東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-1860 東京都港区三田五―二―

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一―四一九

〒〇三―五三九五―六六一三(営業)

〒〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。



子どもたちの大好きなアンパンマンファミリーの人気者を手づくりしよう。おもちゃやプレゼント、壁面飾りで保育室はいっぱい!!

最新刊

## 手づくりアンパンマンがいっぱい(全3巻)

### グッズ・プレゼント

スポンジや牛乳パックなどの身近な素材を使ったグッズ。フェルトのかわいいプレゼント小物。残り毛糸で、すすいあんでポウシヤボールに変身するアンパンマン。うちわやエプロンなど身の回りのあちこちに人気キャラたちが顔を出す、アイデアいっぱいの一冊です。

島田明美／著

A B判 96頁 定価：本体2,000円＋税



### ルームデコレーション

人気キャラクターたちで、保育室の壁面を明るく楽しく演出。入園おめでとうのパネルや、4月から3月までの月ごとの壁面構成は、子どもたちの想像力でゆかいなおはなしも生まれることでしょう。入場門やお店やごっここの屋台・コーナー飾りなど応用アイデアもいっぱいです。

千金美穂／著

A B判 96頁 定価：本体2,000円＋税

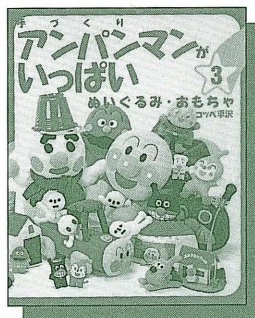


### ぬいぐるみ・おもちゃ

型紙をあてて布を切り、ちくちくぬって化せん綿をつめる。むずかしそうなぬいぐるみも、コッペさんまんに手ほどきしてもらえば、あつ、もうできちゃった! 人形やクッション、フリスビーなど遊べるキャラクターたちは、やわらかく安全なので小さい子どもたちにも安心です。

コッペ平沢／著

A B判 96頁 定価：本体2,000円＋税

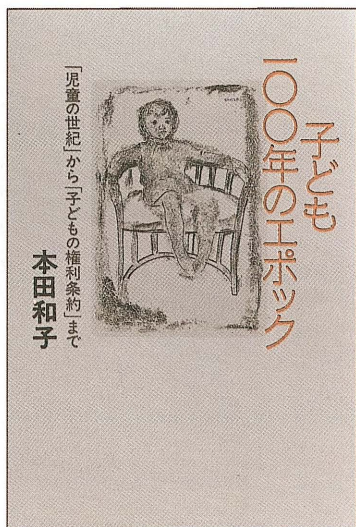


キンダーブックの  
フレール館

20世紀は子どもにとってどんな100年だったのか。  
今世紀の総決算と21世紀の「子ども」を展望した保育者必読の書!!

# 子ども 100年のエポック

「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで



\*本書は  
『幼児の教育』の連載を  
もとに  
まとめたものです。

## 【内容】

この100年間の「子ども観」「子ども-大人関係」の変遷をたどりながら、20世紀の「子ども」を総括した一書です。

世紀の終焉期に頻発する子どもの不可解な事件や理解しがたい言動……これらが物語っていることは何なのか、そしてなぜいま私たちは「子ども」が見えなくなってしまうのか、保育の前提にある「子ども理解」を深めるのに役立ちます。

## 最新刊 !!

本田和子／著

四六判 280ページ 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの  
フレール館